様々な様式の銀器と当時最新のロブマイヤー社のグラスで整えられたサイドテーブル

ヘレンドの食器、ベルンドルフの銀メッキされたアルパッカの果物かご、ロブマイヤーのワイングラス、パステルカラーのテーブルクロスが使われた歴史主義のテーブル。食器の様式や果物かごやピラミッド型のオレンジの糖菓など、バロック時代の食卓デコレーションが取り合わされている

Ingrid Haslinger

● （イングリット・ハスリンガー）

ウィーンに生まれる。
ハプスブルク家宮廷の儀式やテーブルマナー、銀器食器類を研究。1987年『帝国のテーブル文化』、1998年『シシーの食卓』、2001年原著を執筆。

● 宇野佳子

筑波大学大学院修士課程地域研究研究科ヨーロッパ研究修了。専門分野は言語文化。

食卓の喜び 第12回

AUGENSCHMAUS UND TAFELFREUDEN（目のご馳走と食卓の喜び）より

著　者　Dr. Ingrid Haslinger

訳　山下満智子（大阪ガス㈱エネルギー・文化研究所）、宇野佳子

歴史主義時代の食卓の写真

歴史主義時代の食卓での家族写真

歴史主義（1860年ごろから）

過去への回帰

過去への回帰という趣向は、「新しいことに挑戦することなくちょっと変わったことをやってみたい」という揺らいだ願望の表れであると言える。この趣向は、家の調度や部屋の飾りつけ、テーブルセッティングに顕著であった。

19世紀の半ばごろ、人々はそれまでのビーダーマイヤーという時代とは異なる、新たな芸術的趣向に向かおうとしていた。そして過去への回帰を意識した多くのものが作られた。ゴシックやルネサンス、バロックやロココといった様々な様式、さらにフランスのルイ15世様式やルイ16世様式も取り入れられた。この傾向は当然食卓にも見られ、それはまずブルジョワと呼ばれる人々から始まった。当時の最新流行のテーブル飾りと昔のバロックやロココ様式の陶磁器類、センターピース、カトラリーが、何の抵抗もなく、取り合わせて用いられた。テーブルのクロスも必ずしも白である必要はなく、陶磁器の模様とよく合う柔らかいパステルカラーのものが、客を招く際にもごく普通に使われた。

ヘレンドの食器

多くの食卓は、ハプスブルク帝国を代表する企業であるヘレンド社の食器で整えられた。ヘレンドは、1864年に閉鎖されたウィーン工房の陶磁器作りを継承しており、古伊万里などを手本にした食器に加えて、バロックやロココ様式の食器セットも生産していた。

バロック時代の食卓デコレーションを偲ばせる糖菓類や銀製の果物かごが、ルイ16世様式の簡素なセンターピースとともに、食卓を効果的に演出した。ピラミッド型の糖菓は、白いライラックやリンゴの花で飾られた当時の食卓の食器やテーブルクロスによく調和した。

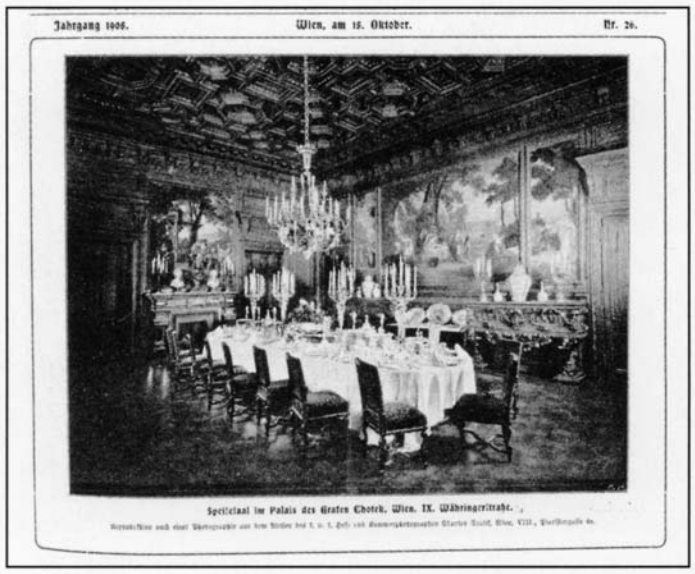
アルパッカの食器

19世紀後半において目新しかったのは、銅、ニッケル、亜鉛から成る「アルパッカ」で、銀メッキを施して使われた。ベルンドルフ（ニーダーエーストライヒ）のアルトゥール・クルップは、この時代の趣味に合わせて、ルネサンスやバロック、ロココ、ルイ16世様式、アンピールなど実に様々な様式のものをアルパッカで生産した。

ロブマイヤーのワイングラス

19世紀半ばごろに、ロブマイヤー社が、非常に簡素な薄手のグラス類、いわゆるモスリン食器を開発した。それは、飲み物用グラスにとって革命的なものであった。ロブマイヤー社のワイングラスは、中に注がれた飲み物を、色彩的にも味覚的にも引き立たせた。このグラスは、ウィーン宮廷にも納品されるようになった。それ以前のグラスは、実用向きではなくむしろ装飾品であった。ホーローをかけたり、費用のかかる研磨を施したり、彫り物をしたり、縁を色付けしたりという過剰な装飾はすべて退けられた。ただし薄緑に色付けするラインワインのグラスだけは例外であった。

食卓のろうそくは、まだ夜の食事で明かりとして灯されるのみであった。今日のように食卓の装飾として使うには、あまりにも費用がかかりすぎたのである。



歴史主義様式のサイドテーブル付食堂の間（ウィーンのホテク伯爵家の写真）